

司会（佐藤主幹）

——開 会——

本日は、御多忙のところ、令和3年度第1回福島県地域創生・人口減少対策有識者会議にお集まりいただきましてありがとうございます。私、本日の進行役を務めさせていただきます企画調整部復興・総合計画課の佐藤でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は西内委員がリモート形式で参加いただいております。できるだけ円滑に進行できるよう努めてまいりますので、御協力よろしく願いいたします。

司 会
企画調整部長

——挨拶——

それでは、はじめに企画調整部長より御挨拶を申し上げます。

企画調整部長の橋でございます。本日は、大変お忙しい中、この有識者会議に御参加いただきましてありがとうございます。また、7名の委員の皆様には、午前中からいわき、小名浜の視察、そしてここの伝承館の視察をいただきまして、大変お疲れのところだと思いますので、この有識者会議を円滑に進めていければと思っております。

御承知のとおり、今のコロナの状況は感染者が急激に減少しており、今後の第6波をいかに回避していくか、いかに経済活動の維持・回復と感染者の拡大防止を両立していくか、ということが非常に問われていて、今後の地方創生の取組も、ウィズコロナの中で、こういった意識や行動の変容というものを的確に勘案していかなければいけないと思っております。

県においては、この9月定例県議会に、来年度から2030年度を目指す、県の最上位計画である総合計画を御議決いただきました。これを受けて「ふくしま創生総合戦略」でも考え方や色々な指標を掲載しておりますが、年度末に向けて、一部、指標等を変えて反映していくこともやっていかないとはいえないと考えております。

本日の会議では、昨年度、令和2年度の地方創生関連事業の効果検証ということで、委員の皆様から事前にいただきました評価を踏まえて御議論いただきたいと思っております。事前に非常に詳細かつ丁寧にお答えをいただきましてありがとうございます。来年度の事業構築に向けて、委員の皆様にはこの場でも忌憚のない御意見をいただければと思っております。

県といたしましては、総合計画に掲げる2030年に実現したい福島の将来の姿を実現していくために、今日の午前中の小松理虔さんのお話も非常に大変参考になったところではありますが、復興と両輪で進める地方創生が、そういったことをしっかり反映していければと思っておりますので、実りある御議論をいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

司 会
岡崎座長

続きまして、岡崎座長から御挨拶をお願いいたします。

皆さん、今日は朝早くから大変御苦勞さまでございました。やっぱり福島県は非常に広いですね。海側の半分だけ、しかも一部ですが、拝見するだけで

	<p>も、これだけ時間がかかる場所ですから、山側も合わせるとうかに福島というところが資源豊かな可能性のあるところだと、そういうことを今日つくづく感じさせていただきました。</p> <p>今日は、4時ごろを会議の終了時間と想定させていただき、会議を取り運んでいきたいに思います。どうぞ御協力をお願いいたします。</p> <p>西内先生、遠くからですが、ぜひ御意見等をよろしくをお願いいたします。それでは、早速、会議のほうに移っていきたく思います。</p>
<p>司 会</p>	<p>——議 事——</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>続きまして議事に移ります。これ以降の進行は座長にお願いしたいと存じます。岡崎座長、よろしくをお願いいたします。</p>
<p>岡崎座長</p>	<p>それでは今日は議題が2つになっております。まず「地方創生関連事業の効果検証」、これについて、県の担当部署や復興・計画課の皆さんの御意見をいただき、この事業について各委員から御意見をまたいただきたいというふうに思っております。多くの事業が評価対象になっておりますので、すべてというわけにはいきませんが、その中でピックアップしながら御意見ををお願いしたいと思っております。</p>
<p>復興・総合計画課長</p>	<p>まず最初に事務局のほうから御説明をお願いします。</p> <p>改めまして、復興・総合計画課長の佐藤でございます。それでは座って御説明をさせていただきます。</p> <p>お手元の資料1-1をお開きください。この総括表につきましては、KPI達成状況につきまして、県の各部局のほうで整理した自己評価と各委員の評価の違いをマクロで見るためのものがございます。下のほうにその差というのが見てとれるかと思っております。A判定では自己評価は42、委員評価は29、反対にBのほうは、自己評価が30、委員評価が41といった、例年こういう差異が見られるところがございます。説明のほうは省略させていただきます。</p> <p>その裏面をお開きいただきたいと思っております。委員の皆様からの具体的な指摘事項です。全般的事項としましては大まかには3点、「事業の効果を広くアピールすべきである」ということ、「KPI設定を妥当なものとするべき」、それから「コロナ禍でもできることを検討すべき」といった御意見をいただいたところです。</p> <p>なお、KPIにつきましては、先ほども部長のお話にもありましたが、後ほど議事(2)「その他」というところで説明させていただきます。先般策定しました新しい総合計画の策定過程において、総合計画としての指標のブラッシュアップを図ってまいりましたので、今後、総合戦略のKPIをアップデートしてまいりたいと思っております。個別の御意見は後ほどピックアップさせていただきますが、いただきました御意見はしっかり踏まえまして、令和4年度の事業構築に反映してまいりたいと考えております。</p> <p>それでは資料1-2及び資料1-3を御用意いただければと思います。主に</p>

委員の皆様からの御意見を御紹介させていただきたいというふうに思います。本来すべて御説明しなければならないところですが、主に委員からの追加意見が提出されている事業、事業として最終年度であって次年度交付金申請に向けて新たな視点が必要な事業、それから、今回の視察先に関連した事業、こういった事業を10程度ピックアップさせていただいて、概要を説明させていただきたいと考えております。

それでは1ページ目をお開きください。1番「結婚から子育てまでみんなで支える環境整備事業」でございます。ふくしま結婚・子育て運営センターの運営を始め、結婚・妊娠・出産・子育てのライフステージに応じた各種事業を実施するものでございます。石山委員からは、「マッチングアプリ前提の事業構築の費用対効果」について御意見をいただいております。また、渡辺委員からは追加の意見で「出会いの場の前の段階でのセミナーや勉強会とセットにするなどの工夫」について御指摘をいただいたところでございます。

続きまして5ページ目をお開き願います。23番「産業活性化プログラム」についてでございます。地域中核企業と県内企業の連携より製品開発、販路拡大等の促進を行うものでございます。石山委員、渡辺委員からの当初意見を踏まえまして、コロナ禍も踏まえた工夫なども加えつつ継続としております。さらに石山委員から「自動車産業については広域行政エリアでの取組が必要ではないか」との追加御意見をいただいたところでございます。

その下、24番「地方拠点強化推進事業」についてです。企業の本社機能の移転や拡充に向けた調査や企業訪問の取組となっております。須貝委員から「コロナ禍により地方拠点強化推進には追い風が吹いている。東日本大震災の経験を生かして企業のBCP拠点を誘致してはどうか」との御意見をいただいております。

続きましてその下、25番の「オールふくしま経営支援事業」についてでございます。金融機関や商工団体、税理士等による経営支援体制の運営の取組でございます。令和3年度で最終年度を迎える事業でございます。石山委員からは「支援担当者レベルでの情報共有や人事交流への踏み込み」、それから渡辺委員からは「面的支援が行えているかが課題」とした意見をいただいたところでございます。さらに石山委員からは、追加として「金融機関、県内中小企業支援機関とも、ほかの組織と連携を取りながら業務を進めるという組織文化は薄いのではないか」との御意見をいただいたところでございます。

続きまして8ページ目をお開きいただきたいと思っております。37番の「スタートアップふくしま創造事業」でございます。創業期から成長期にわたる総合的な創業支援事業となっております。石山委員からは「起業家の発掘からインキュベーションの仕組みの再考」、それから高橋委員からは「新規起業にこだわらず、起業まもない事業者の支援強化にフォーカスすることも必要である」という御指摘をいただいたところでございます。さらに渡辺委員から「大企業や中堅企業からの新規事業創出からのほうが成功率や成長度が高いという統計があるため、支援対象についてもそのような視点も持ち合わせてはどうか」との御指摘

をいただいたところでございます。

続きまして 12 ページ目をお開き願います。56 番「ふるさと福島若者人材確保事業」についてでございます。若者の県内定着や還流に向けた学生等への情報発信事業となっております。追加の御意見として、渡辺委員から「県内に入学した大学生をとどめる施策として、デジタルを活用して大学連携の地元経営者の特別講義、リカレント教育の場をつくってはどうか」との御意見をいただいたところでございます。

続きまして 13 ページ目にまいります。58 番「そなえるふくしま防災事業」についてでございます。防災ガイドブック「そなえるふくしまノート」、これの活用等、県民の防災意識を高める取組でございます。日下委員からは「東日本大震災から 10 年。当時中高生だった子どもたちが父親・母親になり、子どもを守らなければならない世代になってきているのに、危機意識が低いと痛感している」、それから、高橋委員からは「知識としての防災ではなく、わが事としての意識醸成が必要」との御指摘をいただいております。

さらにその下のほうになりますが、61 の「地域密着型プロスポーツふくしまの元気応援事業」についてでございます。プロスポーツチームと共に本県の魅力を県内外に発信するとともに、スポーツを通じた県民の心身の健康、夢の育成を図る事業でございます。赤松委員からは「県全体で心を一つにしてプロスポーツを応援することができたら素晴らしい」、石山委員からは「スポーツをおこなっている人たち、特に子どもを通じて、その親とのつながりを強化することが現実的」との御意見をいただきました。さらに追加意見として、石山委員から「スポーツビジネスにおける成功、持続可能な団体運営などについて関係者間のコンセンサスをつくっていくことがまずは必要」との御指摘をいただいたところでございます。

続きまして 15 ページ目にまいります。70 番「『地方創生路線』只見線利活用プロジェクト」についてでございます。来年度全線復旧となります只見線の利活用の取組でございます。赤松委員からは「沿線の異業種のプレーヤーと連携し、新しい切り口で観光客を呼び込めるように」、また岡崎座長からは「産業遺産として子どもたちに伝えていく機会にもつなげるべきである」との御意見をいただいております。

続きまして 16 ページ目をお開き願います。73 番「ふくしまチャレンジライフ推進事業」についてでございます。県中、会津、南会津、いわきエリアにおける新しい働き方と暮らしを首都圏等の若者に体験してもらう事業でございます。岡崎座長からは「外の人材と受入集落をつなぐ地元チーフディレクターのような人材を発掘する必要」、それから関委員からは「移住者を増やすためには、血の通った交流を県内各地でたくさんつくる地道な取組が必要である」との御指摘をいただいたところでございます。

続きまして 17 ページ目をお開き願います。78 の「都市人材とつながる。ふくしまの未来共創事業」についてでございます。さまざまな課題を抱える県内事業者と地方貢献意欲がある都市人材、イコール副業人材になりますが、こう

	<p>した人材との交流を促進する事業でございます。高橋委員からは「副業人材の活用は事業者の課題解決のための方策であることを前面に打ち出して、事業認知度と利用率を上げて行くべき」、それから「ニューノーマル時代には不可欠な取組である」との御指摘をいただいたところでございます。</p> <p>以上、御説明申し上げましたが、事業以外の御意見をいただいております、そちらにつきましても御指摘を踏まえ、次年度以降の有識者会議においてより効果的な審議をいただけるよう、また、県庁の地方創生の取組がよりよい方向に向かえるよう、先般策定いたしました新しい総合計画も活用しながら取組を進めてまいりたいと考えております。</p> <p>以上、委員の皆様にはこれだけ多くの事業に真剣に向き合ってくださいましたことを改めて心から感謝を申し上げまして、私からの説明とさせていただきます。ありがとうございました。</p> <p>御説明ありがとうございました。今の課長の御説明でもかなり絞ってピックアップしていただいたわけです。時間的なこともございますので不確実ではありますが、追加的な意見がございましたら、ぜひ御発言をお願いしたいと思います。</p> <p>まず、1ですね、「結婚から子育てまでみんなで支える環境整備事業」ということで、これは石山委員から追加意見があったということですが、何か追加の御意見はございますでしょうか。</p>
<p>岡崎座長</p>	<p>大丈夫です。</p> <p>大丈夫ですか。</p> <p>それでは次に、これは5ページになりますね。5ページの23の「産業活性化プログラム」。ここも石山委員のほうから御意見をいただいたわけですね。石山さんのほうから何か。</p>
<p>石山委員</p>	<p>そうですね。ここの意味は、1つの企業に何かをやっているというのは難しいと思うので、サプライチェーンも含めた広域的なところに支援していくという意味で書かせてもらいました。ただ、ここ自体がやっぱり時代の流れとして、お金を入れてもその効果というのは昔ほどは見込めないもので、この事業自体がどうなのかと思って書いたところでございます。</p> <p>以上です。</p>
<p>岡崎座長</p>	<p>それでは、続きましてその次の24番の「地方拠点強化推進事業」、これにつきましては須貝委員から、ウィズコロナといいますか、そういう時代における福島での新しい地方拠点整備推進ということについて御意見をいただいておりますが、今日は担当の企業立地課のほうも参加されておられると聞いていますので、須貝委員から追加の御意見がありましたらぜひお願いしたいと思います。</p>
<p>須貝委員</p>	<p>須貝でございます。今日はどうもありがとうございます。</p> <p>特に大きな追加はないのですけれども、この評価を書いた当時、ちょうど都内から皆さんが地方に逃げ出すという状況が起きていて、福島県に本店を構える企業さんがなかなか出ないという中で、コロナ禍があって住民が都内から移動しているという環境というのがあったものですから、いい機会なのではない</p>

	<p>かと思いました。</p> <p>ただ、ウィズコロナ、アフターコロナ、いろんな政策がある中で、SDGsも含めてどうなっていくかというのは注意深く見守りながら、それから、南海トラフの件も必ず起きるといわれていますので、そのときに全国に先駆けた何かモデルになるようなものができていけばなという思いで書かせていただきました。</p> <p>以上でございます。</p>
岡崎座長	<p>ありがとうございました。それでは、すぐ次の25「オールふくしま経営支援事業」でありますけれども、これも石山委員と渡辺委員からも追加の意見をいただいております。何か補足していただくことはございますか。渡辺委員はいかがですか。</p>
渡辺委員	<p>この事業は、複数の支援機関が連携して、企業の支援に当たるということなんですが、一社一社やっても、それは点になってしまうので、例えば、ある産業でクラスターのなところをまとめてやるとか、それから、地域で、例えば複数の観光の旅館とかそういうエリアを支援するとか、そういう面的な支援も必要なのかというお伺いを入れさせていただきました。</p>
岡崎座長	<p>石山さんはいかがですか。</p>
石山委員	<p>渡辺委員のおっしゃったこととほぼ重複すると思います。今までのネットワークに参加している金融機関とか、そういう団体がやはり連携して情報を共有するという文化が今までなかったと思うので、それをみんなで共有しながら進めていく形がいいのかなと思いました。そのためには、「よろず支援」とここに書きましたけれども、そういった拠点のところに各支援機関のほうから出向者を出して、1つの情報をいろんな団体で共有して進めていくというのが例としてできるかなと思ひまして書きました。</p> <p>以上です。</p>
岡崎座長	<p>ありがとうございました。</p> <p>続いては8ページですね。8ページの37番の「スタートアップふくしま創造事業」、これは、まず渡辺委員から追加意見をいただいたわけですが、渡辺委員は何か補足していただくようなことはございますか。</p>
渡辺委員	<p>ここに書いてあるとおりですけれども、恐らく大学生とか個人の方が一から起業して創業するような事業イメージかと思うのですが、逆に、もともと大企業とか中堅企業に勤めていた方は、社内にながら新たな事業をしてサイド事業にするみたいなことのほうが逆に成長したり、最後、生き残ったりという統計も多いという記述もあり、そういうところも支援対象として大きくしたほうがいいのかないかなというところを書いております。一からやはり創業して大きくなっていくほうが、それは確かにきれいな絵ではありますけれども、スピンオフみたいなところも対象にしたほうがいいのかないかなというところでございます。</p> <p>以上です。</p>
岡崎座長	<p>ありがとうございました。高橋委員はいかがでしょう。何か追加意見はございますか。</p>

高橋委員	<p>特に追加というのではないのですが、私のところでも、起業したいという御相談が、最近、このコロナの中ですごく増えているんですね。ただ、何を具体的にしたいのかというところをしっかりとつかんでいらっしゃる方がいて、すぐに何かを始めたいという御相談が非常に多いので、今日の午前中の視察のように、本当に自分がやりたいことを持っていらっしゃる方であれば比較的容易なことではあるとは思いますが、御自身の will、can、must をもう少しきっちりと整理した上で起業するというようなところの支援をできる事業だといえるのかなと思っております。以上でございます。</p>
岡崎座長	<p>続きまして 12 ページの 56 番ですけれども、「県外から県内大学などに入学した学生を定着させる方策」ということを渡辺委員から追加で御提案をいただきました。渡辺委員からその趣旨を御発言いただいて、その後、西内委員からも、大学生に対応しておられるお立場から御意見がありましたらぜひお願いをしたいというふうに思います。まず、渡辺委員はいかがでしょう。</p>
渡辺委員	<p>こちらは、「ふるさと福島への思いの醸成を図るとともに」ということなので、県外の大学生、福島県の高校から県外の大学に行った学生をもう一回福島に戻そうみたいなことを想定されているかと思うんですが、逆に、東京とか北海道とかいろんなところから福島の大学に来てくれた方がそのまま福島のところ就職みたいな観点もあってもいいのかなというところをここに書いております。</p>
岡崎座長	<p>以上です。 では、続いて西内先生、いかがでしょうか。</p>
西内委員	<p>今の渡辺委員の追加の意見を事前に読ませていただいて、本当にそうだなというふうに思っています。高校までで（県外に）出ていく高校生を一生懸命引き止めるというのは大変難しい取組になっていて、逆に福島を選んで来てくださった若い人たちに、本当にここはいいところだなというふうに感じていただけるような、そういう取組を実際に各大学で今やっています。</p>
岡崎座長	<p>渡辺委員は「県内にはたくさんの大学がある」と書いてくださったんですが、うちの県は大学の数が非常に少なく、福島市内に5つの大学が集中しているものですから、福島市内でプラットフォームを形成して、さまざまな取組を展開している最中ですが、これが県レベルとなると、一応、「アカデミア・コンソーシアムふくしま」というのがありますが、ネットワークの構築がしっかりとできていないんですね。できたら福島県全体のコンソーシアムがもっと機能的にといいですか、うまく私たちも連携しながら進められればなというのを、県庁のある福島市のほうにいるものですから、痛感しております。ありがとうございました。</p>
岡崎座長	<p>どうもありがとうございました。 それでは、次のページ、13 ページの 58 番ですね、「そなえるふくしま防災事業」について、今日ここ伝承館でも、副館長の方が特にこのことに重点を置いた御説明をいただいたかと思っておりますが、これは日下委員のほうから、今日、御覧になったこの伝承館の見学感想や、特に日下委員は、新地町でこの前、</p>

日下委員

地震の被害に遭われたと事務局から聞いておりますけれども、そのあたりも踏まえて、追加の御意見がありましたらお願いいたします。

ありがとうございます。今日、皆さんにこちらのほうを見学していただいて、3月11日がどんなものだったかとリアルに見ていただけたんじゃないかなと思うんですけれども、今年の2月13日の（福島県沖）地震は、私の自宅の被害からいいますと、実際、10年前の3月11日より壊れたものも大きかったですし、被災状況として、新地町は津波がなかったものの、災害の状況としては、前回の3月11日、10年前よりもかなりひどいものでありまして、今も現在、新地町の役場庁舎がまだ足場が掛かって、復旧の最中です。

その中で、最近の10月10日、私も地域の復興にいろいろ携わらせていただいた経緯もありまして、沿岸部の公園のほうでちょっとミニイベントをさせていただいていたんですね。子どもさんたちが出演するとかもありまして、公園に1,000人ぐらいの人々が集まったということがあったんですけれども、コロナに対しては、皆さん対策をとられて来られるんですけれども、小さい子どもさんたちを連れてお父さんお母さん方が、じゃあ、避難所はどこなのと。沿岸部は、本当にここ伝承館よりも海に近いぐらいの場所でのイベントだったんですけれども、そういった方たちが避難所の場所をよく確認をしていない。避難ルートとかも確認していない。1,000人クラスで人が集まってくると、車は駐車場から出るときものすごく大変なんですけど、そういうところの危機意識みたいなものもやはりまだまだ少ないなと思っていて、当時、中学生・高校生だった方たちがお父さんお母さんたちになってきて、そういうところもサポートしてあげられたらいいなと思って、この間もイベントの直後に皆さんで検討会をさせていただいたところでもあったんです。

話があちこちになりますけれども、「そなえるふくしまノート」とかを拝見するものすごくいいんですね。ところが、そういう若い世代の方たちがそういう冊子を手取る機会がなかなかないんですよ。広報誌などと一緒に入ってきたりとかはするんですけれども、広報誌を拝見する年代の方は、結構、年配の方たちのほうが多くて、若い世代たちのほうは広報をあまり確認しなかったりとか、そういった、せっかく取り組んでいращやるものを若い方たちがリアルに手に取って見られる状況とか、あとは、せっかくなので、その「そなえるふくしまノート」とかをネット上で確認したりとか、QRコードからすぐ見られるような状況になったりとか、何かもうちょっと工夫があっても面白いのかなと思っておりました。

どうもありがとうございました。

岡崎座長

高橋委員も同じような御意見ですね。そういうパンフレットや講座だけではなくて、わが事としてどう受け止めていくかという御趣旨の御意見をいただいております。何か追加的にございますか。

高橋委員

ありがとうございます。おっしゃったように「そなえるふくしまノート」は、本当に私も拝見したらすごくいいものだなと思ったんですけれども、実はこの事業検証の御依頼をいただくまでは存在を知りませんでした。データをいただ

いて、そういうものがあるんだということを知って、実際、県のホームページで調べて、PDFもあるんだなということを見つけて、早速、それをダウンロードして、弊社の社員にはデジタル配布をしたんですけども、まず、存在を知らないということがひとつ大きなポイントになると思いますし、すごくもったいないことだと思いました。

あとは、知識としてはものすごく役に立つことがいっぱい載っているんですけども、それが果たして自分に必要な情報なのかどうかというのが、まさに今おっしゃったみたいに「わが事」になっていないというのがすごく怖いと思います。3.11のあと、いろんな市町村さんで防災訓練をやるのを、私もヘルプ、受託という形でいろいろやらせていただきました。自衛隊と一緒にやったり、いろんなことをやらせていただいたんですけども、でも、やはり平和が続くと忘れてしまうんですね。何か本当に簡単なことでもいいから、自分が今ここで被災したら何が必要だろうかということにもうちょっと取り組めるような、健康づくりでも同じだと思うんですけども、日常的に災害に備えるということが当たり前になるという機運醸成という仕掛けをすることがもしかしたら行政としてすごく必要なことなのかなというのは感じております。

以上でございます。

岡崎座長

ありがとうございました。私も2週間ほど前に山形県の小国町のほうへ出向いておりましたら、その山間部の高等学校がかなり小規模化してしまっていて、そこでやられている授業は、小国町自体のことを高校生がきちんと学ぶというんですね。1年生は実態を知るとか、2年生はそれに加えて自分たちは何ができるか、3年生は提言ということなんです。これを通じて地域に関わるということをやっていたんですが、最近、やっぱり非常に関心が高いのは、日中は元気があって力があって動けるのは高校生だと。親はみんなどこかへ働きに行っているんですね。だから、もし日中に小国町でそういう大きな災害等が起きれば、即戦力は高校生だということで、高校生が防災の取組を本当にわが事としてどうあるかみたいなことも議論にはなっているようで、非常に大切なことだなということを感じました。

それでは、同じページの61の「地域密着型プロスポーツふくしまの元気応援事業」、これは石山委員から追加意見、それから赤松委員も御意見をいただいております。何か追加的なことはございますでしょうか。まず、赤松委員はいかがですか。

赤松委員

ありがとうございます。特にはないんですけども、私もプロ野球とか大リーグを全く見たことがなかったのが、大谷翔平選手の活躍で、朝起きたら一気に、モーニングルーティンとしてという。その日一日に活気を大変いただいで、いまだにユーチューブを見たり、一日楽しく過ごすひとつのきっかけになっているんです。それで、改めて、スポーツが持つ力、プロスポーツが持つ力というのを再認識して、もともとそんなにスポーツに関心がなかったですけども、今回のことで本当に大事だなと思いました。

ただ、郡山ですとかそういったところだとのぼりが立っていたり、プロスポ

一ツなんだなとわかるんですけども、会津はそういうものが全くなくて、昔から子どもたちをサッカーの試合に連れていったり、仕事でそういう担当をしたこともあるんですけども、いわきの方とギャップがありすぎてしまって、施設そのものも。そのときにはいわきのほうは原発があるからすごいんだと、そういうふうに思ってしまったんですね。そのぐらい設備とか整備に遅れをとっていると思っていて、スポーツで地域おこしというものの中ではあまりないような気がしていますけれども、今回はそういったことでプロスポーツとかスポーツに大きな力をもらったので、ぜひ手を挙げて、会津のほうもちょっと手厚くしていただいて、元気をつけていていただきたいなと思います。

ありがとうございました。

石山委員は何かありますか。

資料に書いてあるとおりなんですけれども、実際、私自身も福島ホープスの立ち上げから3、4年関わっていて、金銭的な経営が非常にやっぱり苦しくて、そのところが、やはり県も一生懸命、スペシャルマッチとか、新聞社とか、子どもたち等を巻き込んでやっているんですが、なかなかもってうまくいかないのはなぜかと考えると、経営のノウハウを持っている方がまずいないということだったりとか、思っただけでやっているという、その経営的なところもしっかりとできる方々を引っ張ってやっていくことが必要なのかなと。これはプロスポーツチーム側にももちろん責任があるので何ですけども、こんなことで。

ただ、この金額を見ると、やはりかなり力を入れて福島県はやっているのですが、これは継続してやっていただきたいんですが、実際、団体側のほうの問題と、サッカーでいうならば2つあったり、やっぱり県として取りまとめを、何か横串を刺してできないかなとか思ってここに書きました。

以上です。

特に赤松さんがおっしゃったように、大谷翔平効果というのはすごいものもあるし、それから、私は1つ気がついたんですが、今年のオリンピックですね。ほとんど無観客で行われたんですけども、選手の、特にメダルを取ったような選手がインタビューを受けているときに、よく聞いていると、日本の選手は、親や友人やサポートしてくれた人たち、それから特に地域社会に対して、「私を育ててくれた町」とか「面倒を見てくれた商店街」とか、そういうことに対してお礼を言っていて、これは海外の選手はほとんどそういうことはないというふうに僕は見ていて非常に強く感じたんですね。

これはとてもいいことで、もともとはJリーグが93年にスタートしたときに、立ち上げたのは岡野俊一郎さんとか長沼健さんとか、この人たちがドイツのスポーツ運営に学んで、地域社会に根づいたスポーツでないとは横展開しない、持続性がないというんですね。子どもから大人までが楽しめるスポーツということで、地域とスポーツという部分にすごく関心を持って、日本にこれを導入しようというふうにしたんですね。だから、何かそういうふうな視点で日本のプロスポーツの、地域に目を向けてもらうということがこれからも必要で、例えばバスケットのBリーグでも、「地域の繁栄なくして自分たちのチームの繁栄

岡崎座長
石山委員

岡崎座長

赤松委員	<p>もない」ということをほとんどのチームが言っているし、ちょっと北に行った宮城県の女川にサッカーチームができていますよね。ああいうふうには地域社会がスポーツを応援するという、すごく密接な関係をつくるということが、これからは地域とスポーツ両方から必要なことかなというふうに感じています。</p> <p>続いて15ページですね。「只見線の利活用プロジェクト」ですね。赤松委員は地元ですし、来年度、只見線が全線開通ということもございますので、何かこれについての考え等はございますでしょうか。</p> <p>ここに書いたとおり、奥会津というのは特別な文化、食文化を持っていて、このコロナ禍で出かけるところがない時期によく出かけていたところですが、何度行っても何度見ても新しい発見がありまして、会津若松とは全く異なる感じがして、食文化。午前中の、小松理度さんの話にもありましたように、西会津ですとか只見ですとか、そういったところにも新たな若い方が新しいプレーヤーとしていろんな動きをされています。そのほかに、景色がまた素晴らしいし、今、工事があちこち進んでいまして、あれが完了したらとてもよくなると思うので、これからは奥会津の時代かなというふうに思いまして、先ほどのいろんな仕事、誘致ですとか、創業ですとか、そういったところも魅力づけのひとつになるのではないかなと強く思っています。</p>
岡崎座長	<p>そうですね。ありがとうございました。</p> <p>それでは、次のページ、16ページですね、「ふくしまチャレンジライフ推進事業」。ここは関委員のほうからお願いしたいと思いますが、午前中の小松さんのお話の感想も含めて、先ほどのところでも関さんは御発言しておられましたけれども、移住者等に関して何かコメントがありましたらお願いします。</p>
関委員	<p>わかりました。ありがとうございます。</p> <p>先ほど小松さんのところに伺いましてとても感銘を受けました。ああいう方が地域に1人いればかなり地域は変わっていくのだろうなと思いましたが、でも、1人では地域は動くわけではなくて、やっぱり周りの方々をどうやって巻き込んでいくか。あの方は「自分が楽しいことをやるんだ」ということで、だんだん仲間を、「あいつ、楽しそうだ」と来るから動いていくと思うので、それもひとつのアプローチでしょうし、強烈なリーダーシップでやる手もあるんですけど、そうじゃなくて、地域が何か楽しいことをやっていると、周りから見て、リーダーシップというわけじゃない、地域そのものが、みんながそれぞれ勝手なことを楽しそうにやっている姿を見てということがやっぱり人を呼び込んでいこうと。</p> <p>小松さんもおっしゃったけれども、「何か実現できるんだよ」ということをおっしゃっていたので、あそこに行けば何が、これは福島県のスローガンも「ひとつ、ひとつ、実現するふくしま」となっていますけれども、「実現できる場所、それが福島なんだよ」ということを移住者なり、何かやっている人が周りの方に伝えていけば、そこに人がおのずと集まっていくのかな。小松さんもおっしゃったけれども、やっぱり、でも、人材がいなければだめなんだという。やっぱり人をつくっていかねばいけないうですね。そこにどう政策として臨ん</p>

でいくかはすごくあると思うんです。こういう事業をいっぱいやっているけれども、やはり成果は問われるし、イベントも5,000人とか参加者を集めてこいとか数字でいきなりきて、と小松さんはおっしゃったけれども、そうではなくて、小さいのをずっと続けてやるかというほうが絶対に効果はあるでしょうけれども、行政はやっぱり数字が問われるので、非常に難しいけれども人材育成していかなければ続いていけないと思いました。

なので、この事業の話とは離れてしまうけれども、でも、人材育成といって学校をつくるわけにもいかないの、やはり福島に来ていただいて、地域で何かチャレンジしている姿、その姿を見てもらって、よければ手伝ってもらってという、つかず離れずの関係で、小松さんがおっしゃっていた「共事者」ですね。「共事者」づくりを進めるためにも、その場づくりとか交流の機会を、チャンスを増やすとか、やっぱり地道にやっていくことが大事だと思って、その中で私が書いたのは、ただ、それが機械的ではなくて、血の通った交流をいかにやっていけるかがほかの地域との差ですかね。だから、行政だけではできないことでしょうし、民間の力でやっていかないといけないかなということをお松さんの話を聞いて改めて思ったと同時に、これらの事業でも、確かに数字的な成果は絶対大事ですけども、やはり参加者がどれも当事者だけではなくて「共事者」としてチームのメンバーになっていただけるような事業を展開してほしい。一回固まれば、その中で多少なり変わっていきます。いい思い出があれば変わってくるので、小学生なり高校生なりが大人になって、地域に関わる仕組みづくりをやっていただければと思っています。

岡崎座長

ありがとうございました。関さんも移住者で、今日の小松さんもUターン者ですよ。特に今は新しいステージで、私が以前考えていたのは、地元根づいた、地元のことをよく知っていて、しかも一度外に出たこともあり、外との関係性がわかる人がそういうU・Iターン者を呼び込む非常に重要なポジションだというふうに考えてきたんですけども。

今週の日・月と愛媛県の内子町、翌日は高知県の西、四万十町に行っていましたが、やっぱりU・Iターン者の非常に多いところで、かなり定住化が始まっているんですね。その中の非常に有力な、例えばデザイナーとかカメラマンの経験がある人とか、そういうふうな人が次のU・Iターン者の相談役になってきているという、そういう新しいステージが生まれていて、オンラインコミュニティのようなものをつくって頑張りを始めているというようなことがありましたので、これからは関さんの時代というふうに思います。

次のページ、最後のページですね。「都市人材とつながる。ふくしまの未来共創事業」。これは高橋委員から御意見をいただいておりますが、何か追加的なコメントはございますか。

高橋委員

ありがとうございます。副業は、今、すごく大切になってきているところと、あと、企業としても今までは人材派遣で足りない能力を補おうという動きだったんですけども、福島にいない人でもこういった形でつないでいただいて、本当にニッチな困り事に対して参画していただけるというのは、これはものす

ごい有益な取り組みだなと感じております。

ただ、私は経営サイドの人間なんですが、これのためのセミナーのチラシというのは確かに会社に届いてたんですね。チラシを見たときに「副業セミナー」と書いてあって、ぱっと見た瞬間のイメージは、自社の社員の副業をいかに認めてあげるかと、その労務管理をどうしたらいいかというイメージに受け取られるようなつくり込みのチラシだったので、「うちはまだ副業を認めているし」みたいな、「というか厚労省もやれと言っているし」みたいな、「うちは要らないね」というジャッジをしたんですね。でも、よくよく見ると、これはそうじゃなくて、これは事業の周知のためのセミナーだったというところを知ったときに、「なんだ。行けばよかった」というのが実はあって。これも繰り返しになるんですけども、福島県は周知がとても苦手であらっしゃるなという、そういったところを感じておりまして、これを使いたい企業は実は中小企業ほど使いたいなと思うところがいっぱいあると思うんですよ。なので、もうちょっと目につく形で。

以前、子どもの夜間の救急 110 番をこの委員会で提言させていただいたのも、これでもかというぐらいテレビでやっていただいて本当にありがたかったんですけど、ぜひこの事業も、「またかよ」というぐらい、いろいろ御事情はあると思うんですが、CMなどやっていただくと中小企業の経営者は大喜びすると思いますので、これは本当に冗談抜きでもう少し周知していただけるとありがたいなというふうに思っております。

以上でございます。

どうもありがとうございました。

岡崎座長

何かこれらの 79 事業の評価につきまして追加意見はございますでしょうか。——よろしいでしょうか。

それでは次の議事（２）の「その他」ということで、「新たな福島県総合計画の策定を踏まえた対応について」ということで、まず御説明のほうをお願いいたします。

復興・総合計画課長

御議論ありがとうございました。しっかり踏まえさせていただきまして来年度事業を構築してまいりたいと思います。特に、人の命に関わる「そなえるふくしま防災事業」について、兵庫県知事が福島に来られたとき、私も会いましたが、「20 年たって、南海トラフが起こると思っている県民がとても少ないんだね」とおっしゃったことが今でも覚えていて、そういったことを我々もまさに伝えることをやっていきたいなと思っております。

そうしたことも関わりますが、参考資料 1 ということで、総合計画のお話を少しさせていただきます。ふくしま創生総合戦略の上位計画となります新たな総合計画の策定が完了いたしましたので、その概要を御説明させていただきます。

令和元年に策定を開始いたしまして、総合計画審議会、それから県議会などの議論に加え、初の取組といたしまして対話型ワークショップなども開き、9 月定例県議会において審議をいただいて御承認をいただいたところです。

計画本体について御説明させていただきます。全体構成を中心にとということで、4ページ目、5ページ目を見開きでお開きいただきたいと思います。全部で6章からなっております。

4ページ目の上段を御覧ください。第1章は総合計画の基本的事項となっております。最上位計画であることや、計画期間を令和4年度から令和12年までの9年間とすること、それから、総合戦略と復興計画、これが総合計画の実行計画の位置づけとなることなどを記載しております。

それから、第2章におきましては本県を取り巻く現状と課題につきまして、復興・再生や地方創生の現状と課題、自然災害や新型コロナウイルス、デジタル変革、さらには地球温暖化対策などの横断的に対応すべき課題を3つに分けてお示ししております。第3章におきまして、審議会、地域懇談会、市町村長、小中学生、高校生、大学生など、県民の皆さんの御意見を踏まえた将来の姿をお示したところでございます。

第2章と第3章を踏まえて導き出した県づくりの理念といたしまして、「多様性に寛容で差別のない共に助け合う地域社会（県）づくり」「変化や危機にしないやかで強靱な地域社会（県）づくり」「魅力を見いだし育み伸ばす地域社会（県）づくり」の3つを掲げたところでございます。これらを踏まえて基本目標として「やさしさ、すこやかさ、おいしさあふれるふくしまを共に創り、つなぐ」を掲げたところです。「本県に関わるすべての皆さんが、福島の県づくりを自分事と感じながら、共に力を合わせてさまざまな困難を乗り越え、しなやかで活力にあふれる豊かなふくしま」の実現を目指したいとの思いを込めたところです。

4ページの下段のほうを御覧ください。県づくりの理念と基本目標等を踏まえまして、みんなで創り上げる将来の姿をお示ししております。将来の姿につきましては、県民の皆さんの御意見から導き出した「ひと」「暮らし」「しごと」、この3つの分野ごとに具体的な将来の姿をお示ししております。また、本県の実情を踏まえつつ、SDGsの視点で描いた将来の姿もお示ししております。これにつきましては後ほど補足させていただきます。

5ページ目の上段を御覧ください。第4章におきまして、政策分野別の主要施策といたしまして県が取り組むべき施策をお示ししております。この際、総合戦略の基本的な視点でもある「誇り」「連携・共創」「挑戦」に加え「ご縁」「信頼」、この5つのキーワードを大事にしたい視点として掲げ施策に取り組んでいくことといたしました。続いて政策は、「ひと」分野で5つ、「暮らし」分野で6つ、「しごと」分野で7つを掲げております。

そして、第5章は地域別の主要施策といたしまして、7つの地域それぞれの課題や主要な施策についてお示ししております。

続いて第6章は「計画の推進のために」として、計画推進のための基本的な考え方、PDCAマネジメントサイクルによる自己点検、第三者評価や重点プロジェクトについてお示ししております。最下段につきましては、総合計画を最上位計画として「ふくしま創生総合戦略」や第2期福島県復興計画、分野別

の計画が連なる構造を示したところがございます。

以上が本計画の全体構成となっております。なお、指標の目標につきましては可能な限り数値目標を設定するとともに、項目数も前総合計画と比較しまして40%以上増やしまして276項目としています。

総合計画概要は以上となるのですが、3点補足させていただきます。1点目は総合計画の策定を踏まえた総合戦略の改訂の方向性についてでございます。資料2をお開きいただけますでしょうか。

先ほど御説明しましたとおり、総合計画の指標設定過程におきまして、総合戦略における成果目標・KPIから、目標値や定義、表現を変更したものがございます。この点、整合を図ってまいりたいと考えております。併せて、新型コロナウイルス感染症やデジタル変革などの横断的な視点についても追記させていただきます。委員の皆様にも御確認をいただきながら年度内に改訂を終えたいというふうに考えております。

2点目は、先ほど申したSDGsとの関連についてです。先ほどの参考資料1の33ページ目をお開きいただけますでしょうか。

本県は、未曾有の複合災害からの復興・再生と全国共通の課題である急激な人口減少・地方創生を同時に進めなければならないというほかの都道府県とは異なる状況があります。その上で将来の姿を実現するためには、県内はもとより、本県に心を寄せる国内外の方々との連携・協働、これをさらに進める必要があると考えております。そのため、世界共通言語ともいべきSDGsを使って、実現したい将来の姿をSDGsで翻訳するという作業を行いました。

参考までに46ページ目を御覧ください。46ページ目ですが、「ひと」分野になります。例えば最上段、ワークショップ等を踏まえて紡いだ将来の姿、一番左側ですね。46ページ目の一番左の列になりますが、そちらが「誰もが生涯を通じて健康で、人のつながりを大切にしながら、いきいきと暮らしている」とあります。これをSDGs翻訳したものが次の列になりまして、「③すべての人に健康と福祉を」の福島県版のターゲットとして「若い世代から高齢者まで県民一人一人が心身ともに健康な生活を送っている」というふうになります。さらに右の列は課題、その次は県が実施することが書いてあって、右の列、一番右には指標が書いてあります。

ここで58ページを御覧いただきます。58ページ目の中段より少し上になりますが、例えばメタボがあります。実はメタボの現況値が約3割になっています。これを2030年には約2割以下を目指すというふうにしております。すなわち福島県版SDGsの目標値ともいえる整理を行ったということになっております。

3点目でございますが、この計画をわかりやすく伝えていきたいのですが、伝えることについてぜひ皆様からアイデアをいただきたいというふうに考えています。これだけ分厚いですから非常にとっつきにくい計画だと思いますが、できるだけ身近に感じるものにしていきたいと思っております。当然、概要版だと子ども版はつくります。でも、それでもなかなか伝わらないと思っております。おと

といちよつと話していたら、「連続小説をつくってみたら」「漫画つくってみたら」という意見も出ました。そういったことも積極的に取り入れてみたいなどというふうに思っています。いずれ「SDGsで翻訳した」というのはたぶん強みになるというふうに考えていますけれども、ぜひ、今日ではなくて後ほどで結構ですので、何か思いついたことがありましたらお寄せいただければというふうに思います。

岡崎座長

私からの説明は以上です。ありがとうございました。

ありがとうございました。これだけがっちりとした県の総合計画ですから、普通の人には目にしないですね。県庁の職員でも目にするかどうかちょっと疑問なところもありますけれども。でも、概要版とかそういうものをぜひお作りになるということですが、作っただけでは何の意味もないものですから、これを現実のものとするために、何か委員の皆様方から、こんなことをやったら県民は関心を持つかもしれないとか、そういうお考えや思いつきはございますでしょうか。——どうぞ。

石山委員

知っていただくという意味で、どこの世代というか、ターゲットを絞った別の何か施策が必要だと思うんですね。意識の高い人というか、そういう方というのは自分で手にしたり興味を持って見ると思います。

これはなぜそう考えたかという、福島県医師会でTobacco-freeという団体をつくって、私は民間でただ一人、ドクターに交ざって理事を拝命してやっているのですが、彼らは、たばこや受動喫煙がどんなに悪いかというのを意識の高い人たちだけで確認し合っているんですよ。ちょっとあんまり、「もう吸っている方は悪いと思ってもやめられないから吸っているんであって、そういう方々にどういうふうにしたら届くのかという視点が必要だ」というふうに私がちょっと意見して「あっ、そうなんだ」ということがあったんですが、それと一緒に、総合計画もやっぱり、行政に対して全く関心がない人たちに向けた若者にはこの戦略、ちょっと関心がある人にはこの戦略と、3パターンぐらいつくって段階的にやっていく。その順番として、私が推奨するのは、やっぱり全く関心のない人にどういうふうに届けるかというところを最初にやると、ちょっと関心のある方は向いてくるし、次に、全く関心のない人にこういうアプローチをしたんだったら、より何か3段階ぐらいに。漫画という話が出たと言ったんですけれども、何かそんな形で、みんなに広く伝えるという誰も見ないから、何かそういうところを考えてやればいいのかと思いました。

岡崎座長
高橋委員

以上です。

ありがとうございました。どうぞ。

今、石山さんのほうから「誰に向かって」というお話が出たのですけれども、それは誰に触りに行くかの視点だと思うんですね。逆に福島県に住んでいらっしゃって、自分が関心のある情報をどこに取りにいったらいいかわからないという人もたくさんいるわけで、触りに行く場所がわからない人たちというのも逆方向からいうといらっしゃる状態なんですね。

なので、触りに来てもらう仕掛けとして、今、総選挙が行われていますけれ

ども、ボートマッチングというアプリはご存じでしょうか。投票のマッチングアプリなんですけれども、政党のこともわからない、候補者のこともわからないけれども、自分の趣旨に合うものを「イエス・ノー」で選択していくと「あなたの入れていることはこういう政党のこういうところにマッチしますよ」と誘導してくれるアプリなんですよね。

それと同じで、若者だったり女性だったり高齢者だったり、シングルだったり既婚者だったり、いろんな人がそれぞれ全然違う課題感を持っていらっしゃるって、これは全部把握しろというのはまず不可能な話ですので、その人にとって興味があるところを探しに行けるような、ボートマッチングアプリじゃないんですけれども、そういった何かフローチャート的なシステムがあると、ポイントで自分が興味のあるところを知ってもらえると、だんだんそれが枝葉に分かれて、「じゃあ、これのためにこれはいったいどうなっているんだろう」「これがこうなっているんだったら、あれはどうなっているんだろう」という興味の範囲が広がっていくということもあり得るんですね。ですので、そういった課題を見つけられるような仕掛けというのもひとつ御検討いただくとよろしいのかなと思います。

以上でございます。

ありがとうございました。よろしいでしょうか。

この計画も、あと5年したら次の計画に向けての準備に入っていくわけで、計画づくりというのは、県レベルで県民参加というのはなかなか難しいのですが、つくったものを「さあ、理解してください。関心を持ってください」といっても、なかなかこれは進まないと思います。できる過程、策定する過程でどう参画をしてもらおうかということが最も重要なことかなというふうに思います。次の5年後ぐらいにはもうそれを始めなければいけないので、それに向けた何か参加の仕組みというものも考えていただいたらいいのかなと思っています。

それでは、議題（2）についても御意見が他にないようでしたら、今日の第1回の有識者会議はこれで閉じたいというふうに思います。どうも御協力いただきましてありがとうございました。

——閉　　会——

本日はどうもありがとうございました。これをもちまして、令和3年度第1回福島県地域創生・人口減少対策有識者会議を終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

(以　上)

岡崎座長

司　　会